

幻影のとき

樋口茂子

幻影のとき・樋口

都書房版



幻影のとき

昭和41年2月10日 第1刷発行

¥ 420

著者	樋口茂子
発行者	伊藤金吾
印刷所	星野精版印刷KK
製本所	若林製本

発行所 東京都文京区
音羽町 3-19

東都書房

電話東京(942)1111(大代表) 振替 東京 72732

落丁本乱丁本はお取りかえいたします

© Shigeko Higuchi 1966

目次

あの時のこと

五

昭和三十七年八月十四日——八月三十一日

三

昭和三十七年九月一日——九月三十日

九

昭和三十七年十月一日——十月三十日

二六

あとがき

二五

装帧·田中
岑

幻影のとき

あの時のこと

私が、生涯に二度とある筈のない、三年前のあの重大な危機を、どうにかのりこえられたのは、国友教授の指導に、自分のすべてを、まかせきったからであることは確かだ。

国友教授は、既に私の心は、当時のショックから、完全に立ちなおっていると、断言しているけれども、しかし私はいまだに、母を自分の手で現実の社会から閉ざしたあの日のこと、そして、その後の悲しみを思う度に、狂おしい気持になるのを、どうすることも出来ない。

今も私の胸には、ゆるく波が寄せるように、不安な情緒がこみあげてきている。

その前日、国友教授は、何の前ぶれもなく私の家に訪ねて来た。K大学の自殺研究会で知り合いになったと私に聞かされている、高名な精神科医の突然の来訪に、母はひどく驚いた風だった。が、教授が、巨体をゆるやかにくつろいで、おだやかに母に話しかけるうちに、母は数日來の不穏な状態とはうってかわった、平静な姿にかえった。その時教授は、

「近くに用事があったので、一寸寄せて貰いましたよ」と云ったが、灰色の乗用車を表に待たせて座敷に上り、やく半時間ほど、母と私を相手に話していった。教授は、私のことを話題にすることで、「やはりお母さんがいいから、こういう娘さんが生まれるのですね」「可愛い可愛いでお育てになりましたね」などと云って、つとめて母をひきたて、母を喜ばせた。

やがて帰りぎわに、母が偶然座を立った時、教授は暗い目でじっと私を見つめ、ゆっくりと頷いてみせた。私はそれによって、すべてを察した。教授は母の入院の処置について更に慎重を期するため、母の状態を観察に来、母を入院させることを妥当とみとめたのである。

教授は、すがるような私の目を、更にじっと見続けていたが、それに関することは、その日は一言も云わなかった。もうすべては、それまでに云いつくされていたことは確かだ。

私は門の前の橋の上に立ち、教授の白髪の手、そして大きな背中が、灰色の乗用車の中に消えて行くのを見ていた。車は走り出したが、教授はふかぶかと座席にもたれかかり、私をふりかえらなかつた。私はそれで、すべての決定がなされたことを感じた。私は暫く真青な空を見ながら、立ちつくしていた。

母と私は、例のない仲のいい母娘であると、ひろく世間に信じられている。事実、私達母娘は、一体の人間のようにして生きてきた。

私がもの心ついた頃、既に姉は家にいず、父も一緒にくらすことは、めったになかった。

母が父と一緒に暮らすと、すぐに倒れたり、うわ言を云ったりするようになるのは、母の体がひどく弱いからだとは私は思っていた。私は、母が心に病いを持っていることを、全く知らなかった。後に京都に来て、姉姉と一緒に暮らすようになったが、姉姉とも若くして世を去ったため、すぐにまた母と二人きりの生活にかえった。

国友教授は、母と私の関係を、かつてみたことのない深刻なケースであると云った。片時も私から離れられない母ゆえに、私は仕事を持つことも、自由に外出することも人に会うことも、むずかしい状態におかれている。教授は、母を私から離すことで、私を長年の異常な生活から解放しようという提案を行ない、その教授の意に従って、私の友人達や、仕事関係の人文系の学者達が、私を母から解放する努力を続けてきた。生を求める限り、母と別れねばならないということは、ずっと以前から、私自身充分に承知していることであり、このほどようやく、自分から、母と別れる旨国友教授に伝えた筈の私だった。

私は教授に貰った薬を飲み続けることで、どうにか不安と悲しみに耐え、翌日を待った。

黒い乗用車が門の前に止まったのは、二時をすこし過ぎた頃だったと思う。それは普通の大型の乗用車であつたけれども、私は一目で、その車が、教授の弟子達によって経営されてい

る、A病院からの迎えの車であることを悟った。私はその時、二階の座敷にいたが、ガラス越しに、道路にその黒い車をみとめた時、瞬間かるい眩暈めまいを覚えた。

母は階下の自分の居間にいた。取次ぎに出たのは母だった。母は階段の下から私を呼んだ。その時母は、まだ全く何も気づいていなかった。数日來の不穏な状態は去り、母はいたっておだやかな、品のいい美しい年寄りの姿だった。

「国友先生のお弟子さんが、何かあんなに用事だってよ」と母は云った。

玄関に立っていたのは、教授の弟子の佐伯医師だった。彼は大きな体をグレーの背広に包んでいた。彼は刺すような目でじっと私を見つめ、そして頷いた。私は佐伯医師を案内して二階に上った。彼は普通の私の客とかわらなかった。やがて母が、私の客に対して何時もするように、お茶とお菓子を運んで來た。私と同じ年頃の男の客を目の前にして、母の体は急にこわ張り、目は倍ほどにもひらかれていた。

佐伯医師は、目に媚のある微笑をうかべて、やさしく母に話しかけた。そして、

「滝口さん、すみませんが運転手に、暫く待つように伝えて下さいませんか」

とややつめたく私に云った。

私は立上り、下におりた。その時私の心は殆ど空白と云ってよかった。私は玄関にいま一人、教授の弟子の姿をみとめた。それまでに二度、教授の研究室で私を観察したことのある、

まだ名前は知らない、細身の長身の若い医師が白い怜悧な顔をあげ、殆ど無関心とさえ思われる静かな目で、私を見つめていた。(その医師が、国友教授の最も信頼する弟子、氷上助手であると知ったのは、それから数日後のことである) 私はその時、空を歩いているような気持ちだった。私は氷上助手の顔をまともに見ながら、挨拶することを忘れていた。私が玄関のたたきに立った時、小さく私の耳もとでささやかれた。

「運転手には伝えてあります。ここで待ちましょう」

私はちょっと氷上助手を見上げ、そのまま框に腰掛けた。私は二階の母の様子を思った。が、思考は定まらず暗い眩暈を覚えた。

「冷えますね、部屋に入りませんか」

私は云われて立上り、この十年ばかり殆どつかったことのない、玄関わきの洋室に入った。

濁った色の陽射が古びた家具をぼんやりと浮かばせ、しめった黴かびの匂いがこもっている。私は壁ぎわの長椅子に腰掛けた。氷上助手は、いったんソファーに腰かけたが、すぐに長椅子の私の横に席を移した。彼はやさしい笑みをうかべた目で、じっと私を見つめ、しばしば国友教授がするしぐさで私の肩をだいた。私は国友教授が不安定な私の心を案じて、母の主治医ときめられた佐伯医師のほかに、私のための医師として氷上助手をよこしたことを悟った。

悲痛なこらえがたさに私の胸はゆすぶられはじめていた。それは精神的な不安とか悲しみと

か云ったものではなく、生身の肉を切られるような肉体的な苦痛だった。

氷上助手は精神科医独特の念入りなやさしさで、左腕で私の肩をかかえ、右手で私の左手首を握っている。

「大丈夫ですよ。何も案ずることはありませんよ」

彼はたえず私の耳もとで、同じ言葉を同じ抑揚でくりかえす。

私は次第に彼のささやきのリズムに囚われ、かるい眠りに似た状態に入ってしまった。

私は、白壁に描かれる模様を見ていた。それは海だった。私は母と並んで、まるい丘の上に坐って海を眺めている。岬と岬の間に、僅かに見える青い海だった。私はまだ幼く、それが果てしない海に続いているとは悟れない。母は若く美しい。その僅か映写幕ほどの海の上を、白いジャンクが行き、時に汽船が過ぎる。赤く塗った外国の貨物船が、甲板すれすれまで波につかって、忽ち横切っていく。私は海を見るのにあき、母の背にすがる。私は小さい掌でピチャピチャと母の頬をたたく。母は時々かすかな笑みをうかべるだけで、何も語らず、ただぼんやりと、その僅かな海を眺め続けている。丘の下には、私達の家が見える。壁は薄赤く、屋根は緑だった。丘の背後には、やはり同じように丸くなだらかなみどりの丘陵が、遠く続いている。私は小さい腕でしっかり母にすがりつき、かたく母に身を寄せて、緑の屋根の、二人だけの家に帰る。母と私はまるで日課のように、毎日そのみどりの丘に登った。

足音を聞いて私は目覚めた。氷上助手は私を制し、一人廊下に出て何かささやきあい、すぐ私の横にもどった。私は氷上助手の顔を見つめたが、彼は白い冷静な横顔を見せたまま、私の顔を見なかった。彼は私を見ないまま私の肩をかかえていた。

どたどたと不遠慮な足音が家に上り、そして二階に上って行った。やがてその足音がおりて来た。私は氷上助手の腕をふりはらって廊下にとび出した。白い上っぱりを着た男が二人、一人は足、一人は肩をかかえて、長い廊下を来る。私は茶色い小紋の着物を見た。母の体はぐったりと力を失い、だらりとさがった右腕が、まるで振り子のようにぶざまにゆれている。その横につきそって来る佐伯医師は、やや赤らんだ興奮した顔つきだった。

母は殆ど死体と云ってよかった。頬は暗く落ちこみ、土色の、深いしわのきざまれた額に、ほはけた髪が乱れている。そして三十年もの間私を恐怖させ続けたあの目は、かたく閉じられていた。

母の灰色の顔が、私の前を過ぎた。私は瞬間、十数年前、兄姉の棺につきそった時と同じ苦痛を感じ、ゆるく頭をふった。兄が、そして姉が、死体になり、階段をおろされ、この家から運び出されて行き、骨になって、私の胸にいだかれてこの家に戻って来た。

氷上助手が私の肩をかかえた。

「ラボナールをうってあるのですよ。すぐに目が醒められますよ」

氷上助手は腕に力をこめて、私の耳もとでささやいた。このまま永遠に眠ってくれた方が、母にとっても私にとってもしあわせかもしれないという思いが、瞬間私の胸をかすめた。

玄関の戸があげられた。白足袋をはいた母の足が、吸われるように戸外に消えた。男の白い袖の上で、母の灰色の顔がゆれた。戸外のにぶい光が、はすかいに母を照らし、高い鼻梁と鉛色の唇をうかばせた。母は外に消えようとしていた。突然私の咽から異様な叫びがほとばしった。私の胸で、何かがひき裂かれた。私は素足のままたきにおり、運び出されて行く母の後を追った。が、私はしっかりと抱きとめられた。

それからの、悪夢にひとしい幾月かを、私は決して思ひ出したくない。私の心は破れ、肉体の苦痛だけで、私はかろうじて、自分の生を感じていた。

（昭和四十年十月記）

昭和三十七年八月十四日——八月三十一日

八月十四日 火

「出来るだけ早く帰るわ」

私は母に笑みかけながら家を出る。今日母は意外に機嫌がいい。

京都バスに乗る。バスの中に地元の人がいらないのを確かめてから、私は川端丸太町迄のキップを買う。窓外の青々とした田を見る。私の心は既に前にむかっている。

高いコンクリートの塀の間を病院の玄関にむかって、殆ど小走りにいそぐ。紫色の花が、ちらと目にとまる。

「お待ちになってられます」と受付の女の人が云う。

広い階段を上ると、廊下のつき当りが、国友教授の研究室になっている。精神科医として、

日本でも一、二の権威と云われるこの高名な学者の研究室に、自由に出入りするようになってから、丁度一年になる。ドアはあけはなされたままになってい、教授は今日もただ一人、十坪ほどもある広い研究室の窓ぎわの机にむかっている。白いワイシャツ姿の肉づきのいい大きな肩と白髪の手が僅かに動く。

研究室の片隅には、長椅子と台とソファ―が置かれている。私は何時ものように壁にそって置かれた長椅子に腰かける。教授はソファ―にゆったりと腰をおろした。

「それで」と教授は私をうながす。今日は私の方から話すべきことは別にない。

「お母さんの様子はどうですか」教授の声は小さい。

「今はおさまっています」

「だが、このままではいられませんね」

「勿論そうです。私は先生が解決して下さるのを待っているのです。そのためもう一年も、先生の所に通って来ているんです」

「わたしに解決しろって……。じゃあなたは、お母さんと絶縁する気になったんですね。本当に一人っきりになってしまふんですよ」

教授の口調は相変らずやさしいが、ぬきさしならぬ力がこもってくる。

「自分というものを考えてみなさい。あなたの心さえきまれば、すぐひきとります。すべては